



竹内博は1949年東京生まれ、19歳のときに田村画廊で初個展後、現在まで真木画廊、田村画廊、ときわ画廊、ギャラリー檜等で個展が60回以上と会場にキャプションがある。今回竹内は画廊内にインスタレーション《生》を1点、小品《生》a,b,cを各1点、展示した。

《生》の素材はラッピングシート、テープ、ペンキ、埃である。宙に浮く作品はテープによって頑丈に壁と括り付けられ、素材を溶解してしまうのではないかと言う顔料で一部を着色されている。会場隅にまとめられた埃よりも、壁面、床を流れるテープの存在が気になる。ここには絵画的手法も、インスタレーションの作法も一切存在しない。思えば1980年代は、インスタレーションの時代であった。絵画、彫刻、ドローイング、マンガを含めたサブカルチャーというヒエラルキーが失われ、純粋な、本格的な現代美

術の時代が到来したと考えるのは、今日に考察すれば資本主義の成熟に到る過程でしかなかったことを、身を持って思い知らされる。インスタレーションはこの国で最も高い買い物、土地が必要となる。土地と彫刻以上の費用がかかるインスタレーションを支えていたのは、資本主義の力であった。今日にインスタレーションが潰えたのは、当然のことであろう。

今回の竹内の作品で最も重要なのは、隅に集められたのではなく、会場に漂う埃である。この埃をキャッチすることが可能なのは、浮かぶ作品そのものと、支える素材と、床と壁面に漂うテープ群である。M・デュシャンのいう埃という時間軸は関係がない。C・カスタンダの師は言った。「わしらはこれで路傍の埃になるであろう。多分何時の日か、その埃がまたお前達の目に入ることもあろう。」

